

問うて云はく、法華宗の法門は天台・妙楽・伝教等の積をば御用ひ候か如何。答へて云はく、最も此の御積共を明鏡の助証として立て申す法門にて候。問うて云はく、何を明鏡として立てられ候ぞや。彼の御積共には爾前権教を簡び捨てらるゝ事候はず。随つて或は「初後の仏慧、円頓の義齊し」とも、或は「此の妙、彼の妙、妙の義殊なること無し」とも釈せられ、華嚴と法華との仏慧は同じ仏慧にて異なること無しと釈せられ候。通教・別教の仏慧も法華と同じと見えて候。何を以て偏に法華勝れたりとは仰せられ候や、意得ず候如何。答へて云はく、天台の御積を引かれ候は定めて天台宗にて御坐候らん。然れば天台の御積には、教道・証道とて二筋を以て六十巻を作られ候。教道は即ち教相の法門にて候。証道は則ち内証の悟りの方にて候。只今引かれ候積の文共は教・証の二道の中には何れの文と御意得候ひて引かれ候ぞや。若し教門の積にて候は、教相には三種の教相を立て候。爾前・法華を釈して勝劣を判ぜられたり。先づ三種の教相には何ぞやと之を尋ぬべし。若し三種の教相と申すは一には根性の融不融の相、二には化導の始終不始終の相、三には師弟の遠近不遠近の相なりと答へば、さては只今引かる御積は何れの教相の下にて引かれ候やと尋ぬべきなり。根性の融不融の下にて釈せらると答へば、又押し返して問ふべし。根性の融不融の下には約教・約部とて二つの法門あり何れぞと尋ぬべし。若し約教の下と答へば又問ふべし。約教・約部に付いて与奪の二つの積候。只今の積は与の積なるか、奪積なるかと之を尋ぬべし。若し約教・約部をも与奪をも弁へずと云はゞ、さては天台宗の法門は堅固に無沙汰にて候ひけり。尤も天台法華の法門は教相を以て諸仏の御本意を宣べられたり。若し教相に闇くして法華の法門をいへば「法華経を讃むと雖も、還つて法華の心を死す」とて、法華の心を殺すと云ふ事にて候。其の上「若し余経を弘むるに教相を明らめざるも義に於て傷ること無し。若し法華を弘むるに教相を明らめざれば、文義欠くること有り」と釈せられて、殊更教相を本として天台の法門は建立せられ候。仰せられ候如く、次第も無く偏円をも簡はず邪正も選ばず、法門申さん物をば信受せざれと天台堅く誠められ候なり。是程に知ろし食されず候ひけるに、中々天台の御積を引かれ候事浅猿き御事なりと責むべきなり。但し天台の教相を三種に立てらるゝ中に、根性の融不融の相の下にて相待妙・絶待妙とて二妙を立て候。相待妙の下にて又約教・約部の法門を釈して仏教の勝劣を判ぜられて候。約教の時は一代教を蔵通別円の四教に分けて、之に付いて勝劣を判ずる時は「前の三を麓と為し後の一を妙と為す」とは判ぜられて、蔵通別の三教をば麓教と簡び、後の一をば妙法と選び取られ候へども、此の時もなほ爾前権教の当分の得道を許し、且

く華嚴等の^{ぶつて}仏慧と法華の^{ひと}仏慧とを等しからしめて、只今の「初後の^{ひと}仏慧、円頓の^{ひと}義齊し」等の与の^{だつ}釈を作られ候なり。然りと雖も約部の時は一代の教を五時に分かつて五味に配し、華嚴部・阿含部・方等部・般若部・法華部と立てられ「前の四味を^{だつ}麁と為し後の一を^{さいにん そにん とも}妙と為す」と判じて、^{だつ}奪の^{だつ}釈を作られ候なり。然れば^{だつ}奪の^{だつ}釈に云はく「^{さいにん そにん とも}細人・^{おわ}麁人二俱に過を犯し、^{おわ}過の^{おわ}辺に従って説いて俱に^{おわ}麁人と名づく」と立て^{おわ}了んぬ。此の^{おわ}釈の意は華嚴部にも別円二教を説かれて候へば、円の方は^{おわ}仏慧と云はるゝなり。方等部にも^{おわ}蔵通別円の四教を説かれたれば、円の方は又^{おわ}仏慧なり。般若部にも^{おわ}通別円の後三教を説きて候へば、其れも円の方は^{おわ}仏慧なり。然りと雖も華嚴は別教と申す^{おわ}似非^{おわ}物をつれて説かれたる間、^{おわ}わるき物につれたる^{おわ}仏慧なりとて^{おわ}簡ばるゝなり。方等部の円も前三教の^{おわ}似非^{おわ}物をつれたる^{おわ}仏慧なり。般若部の円も前二^{おわ}麁の^{おわ}似非^{おわ}物をつれたる^{おわ}仏慧なり。然る間^{おわ}仏慧の名は同じと雖も、^{おわ}過の^{おわ}辺に従って^{おわ}麁と云はれて、^{おわ}わるき^{おわ}円教の^{おわ}仏慧と下され候なり。之に依って四教にても^{おわ}真実の^{おわ}勝劣を判ずる時は「一往は三蔵を名づけて小乗と為し、再往は三教を名づけて小乗と為す」と^{おわ}釈して、一往の時は二百五十戒等の阿含・三蔵教の法門を^{おわ}総じて小乗の法と^{おわ}簡び捨てらるれども、再往の^{おわ}釈の時は三蔵教と、大乘と云ひつる^{おわ}通教と、別教との三教皆小乘法と、^{おわ}本朝^{おわ}の^{おわ}智証大師も法華論記と申す文を作りて^{おわ}判釈せられて候なり。次に^{おわ}絶待妙と申すは^{おわ}開会^{おわ}の法門にて候なり。此の時は爾前^{おわ}権教とて^{おわ}嫌ひ捨てらるゝ所の教を皆法華の大海におさめ入るゝなり。随って法華の大海に入りぬれば爾前の^{おわ}権教とて^{おわ}嫌はるゝ者無きなり。皆法華の大海の不可思議の徳として、南無妙法蓮華經と云ふ一味にたゝきなしつる間、^{おわ}念仏・^{おわ}戒・^{おわ}真言・^{おわ}禅とて別の名言を呼び出だすべき^{おわ}道理^{おわ}曾て無きなり。随って^{おわ}釈に云はく「諸水海に入れば^{おわ}同一^{おわ}鹹味、^{おわ}諸智^{おわ}如^{おわ}実智に入らば本の名字を失ふ」等と^{おわ}釈して、本の名字を一言も呼び^{おわ}顯はすべからずと^{おわ}釈せられて候なり。世間の人、天台宗は開会の後は^{おわ}相待妙^{おわ}の時^{おわ}斥ひ捨てられし所の前四味の諸經の名言を唱ふるも、又^{おわ}諸仏^{おわ}諸菩薩の名言を唱ふるも、^{おわ}皆是^{おわ}法華の^{おわ}妙^{おわ}体にて有るなり。大海に入らざる程こそ^{おわ}各別^{おわ}の思ひなりけれ。大海に入りて後に見れば^{おわ}日^{おわ}来^{おわ}よし^{おわ}わると^{おわ}嫌ひ用ひけるは^{おわ}大^{おわ}僻^{おわ}見にて有りけり。嫌はるゝ^{おわ}諸流も、用ひらるゝ^{おわ}冷水も、源はたゞ大海より出でたる一水にて有りけり。然れば何れの水と呼びたりとて、たゞ大海の一水に於て別々の名言をよびたるにてこそあれ、各別各別の者と思ひてよぶにこそ^{おわ}科^{おわ}はあれ、只大海の一水と思ひて何れをも心に任せて有縁に従って唱へ持つに苦しかるべからずとて、念仏をも真言をも何れをも心に任せて持ち唱ふるなり。今云ふ、此の義は与へて云ふ時はさも有るべきかと^{おわ}覚ゆれども、^{おわ}奪^{おわ}つて云ふ時は随分墮地獄の義にて有るなり。其の故は^{おわ}縦^{おわ}ひ一人^{おわ}此^{おわ}くの如く^{おわ}意^{おわ}得、何れをも持ち唱ふるとても、万人^{おわ}此^{おわ}の^{おわ}心^{おわ}根^{おわ}を得ざる時は、只例^{おわ}の^{おわ}偏見^{おわ}・^{おわ}偏情^{おわ}にて持ち唱ふれば、一人成仏するとも万人は皆地獄に墮つべき^{おわ}邪見^{おわ}の^{おわ}悪義^{おわ}なり。爾前に立つる所の法門の名言と其の法門の内に談ずる所の道理の所

詮とは、皆是^{これ}偏見・偏情によりて「邪見の稠林、若しは有若しは無等に入り」の権教なり。然れば此等の名言を以て持ち唱へ、此等の所詮の理を觀ずれば偏^{ひとえ}に心得たるも心得ざるも皆大地獄に墮つべし。心得たりとて唱へ持ちたらん者は、牛跡^{ごしゃく}に大海を納めたる者の如し。是僻見の者なり、何ぞ三惡道を免れん。又心得ざる者の唱へ持たんは本より迷惑の者なれば、邪見権教の執心^{しゅうしん}にて無間大城に入らんこと疑ひ無き者なり。開会の後も麤教^{かうえ}とて嫌ひ捨てし惡法をば、名言をも所詮の極理をも唱へ持って交ゆべからずと見えて候。弘決に云はく「相待・絶待俱に須^{ともすべから}く惡を離るべし。円に著する尚惡なり。況んや復余^{また}をや」云云。文の心は相待妙の時も絶待妙の時も俱に須く惡法をば離るべし。円に著する尚惡し、況んや復余の法をやと云ふ文なり。円と云ふは満足の義なり、余と云ふは欠減^{けつげん}の義なり。円教の十界平等に成仏する法をすら著したる方を惡ぞと嫌ふ。況んや復十界平等に成仏せざるの惡法の欠けたるを以て執著をなして、朝夕受持・読・誦・解説・書写せんをや。設ひ爾前の円を今の法華に開会し入るゝとも、爾前の円は法華と一味となる事無し。法華の体内に開会し入れられても、体内の権と云はれて実とは云はざるなり。体内の権を体外に取り出だして、且^{しばら}く「一仏乘に於て分別して三と説く」とする時、権に於て円の名を付けて三乗の中の円教と云はれたるなり。之に依って古^{いにしえ}も金杖^{こんじょう}の譬へを以て三乗にあてゝ沙汰する事あり。譬へば金の杖を三つに打ちをりて、一つづつ三乗の機根に与へて、何れも皆金なり、然れば何ぞ同じ金に於て差別の思ひをなして勝劣を判ぜんやと談合したり。此^{これ}はうち聞く所はさもやと覚えたれども、悪しく学者の心得たるなり。今云ふ、此の義は譬へば法華の体内の権の金杖を、仏三根にあてゝ体外に三度うちふり給へる其の影を、機根が見付けずして、皆眞実の思ひを成して己が見に任せたるなり。其れ眞実には金杖を打ち折りて三つになしたる事が有らばこそ、今の譬へは合譬^{がっぴ}とはならぬ。仏は権の金杖を折らずして三度ふり給へるを、機根ありて三つに成りたりと執著し心得たるは、返す返す不心得の大邪見なり、大邪見なり。三度振りたるも法華の体内の権の功德を、体外の三根に配して三度振りたるにてこそ有れ、全く妙体不思議の円実を振りたる事無きなり。然れば体外の影の三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば、本の体内の権と云はれて、全く体内の円とは成らざるなり。此の心を以て体内体外の権実の法門^{こころえ}をば意得弁ふべき者なり。

次に禅宗の法門は、或は教外別伝・不立文字と云ひ、或は仏祖不伝と云ひ、修多羅^{しゅたら}の教は月をさす指の如しとも云ひ、或は即身即仏とも云ひて文字をも立てず、仏祖にも依らず、教法をも修学せず、画像木像をも信用せずと云ふなり。反詰して云はく、仏祖不伝にて候はゞ何ぞ月氏の二十八祖・東土の六祖とて相伝せられ候や。其の上迦^{かしょう}葉尊者は何ぞ一枝の花房を釈尊より授けられ、微笑^{みしょう}して心の一法を靈山^{りょうぜん}にして伝へたりとは自称するや。又祖師無用ならば、何ぞ達磨大師を本尊とするや。修多羅の法無用ならば

何ぞ朝夕の所作に真言陀羅尼をよみつるぞや、首楞嚴經・金剛經・円覺經等を或は談じ読誦するや。又仏菩薩を信用せずんば、何ぞ南無三宝と行住坐臥に唱ふるやと責むべきなり。次に聞き知らざる言を以て種々申し狂はゞ云ふべし。凡そ機には上中下の三根あり。随って法門も三根に与へて説く事なり。禅宗の法門にも理致・機関・向上とて三根に配して法門を示され候なり。御辺は某が機をば三根の中には何れと意得て、聞き知らざる法門を仰せられ候ぞや。又理致の分か、機関の分か、向上の分に候かと責むべきなり。理致と云ふは下根に道理を云ひきかせて、禅の法門を知らする名目なり。機関とは中根の者には何なるか本来の面目と問へば、庭前の柏樹子など答へたる言づかひをして、禅法を示す様なり。向上と云ふは上根の者の事なり。此の機は祖師よりも伝へず、仏よりも伝へず、我として禅の法門を悟る機なり。迦葉靈山微笑の花に依つて心の一法を得たりと云ふ時には、是尚中根の機なり。所詮禅の法門と云ふ事は、迦葉一枝の花房を得たりしより以来出来せる法門なり。抑伝へし時の花房は木の花か、草の花か。五色の中には何様なる色の花ぞや。又花の葉は何重の葉ぞや。委細に之を尋めべきなり。此の花をありのまゝに云ひ出だしたる禅宗有らば、実に心の一法をも一分得たる者と知るべきなり。設ひ得たりとは存知すとも眞実の仏意には叶ふべからず。如何となれば法華經を信ぜざる故なり。此の心は法華經方便品の終はりの長行に委しく見えたり。委しくは引いて拝見し奉るべきなり。次に禅の法門は何としても物に著する所を離れよと教へたる法門にて有るなり。さと云へば其れは情なり、かうと云ふも其れも情なり。あなたこなたへすべり、とゞまらぬ法門にて候なり。夫を責むべき様は、他人の情に著したらん計りをば沙汰して、己が情量に著し封ぜらる所をば知らざるなり。云ふべき様は、御辺は人の情計りをば責むれども、御辺情を情と執したる情をばなど離れ得ぬぞと反詰すべきなり。凡そ法として三世諸仏の説きのこしたる法は無きなり。汝仏祖不伝と云ひて仏祖よりも伝へずとならば、さては禅法は天魔の伝へたる所の法門なり如何。然る間、汝断常の二見を出でず、無間地獄に墮せん事疑ひ無しと云ひて、何度もかれが云ふ言にて、やゝもすれば己がつまる語なり。されども非学匠は理につまらずと云ひて、他人の道理をも自身の道理をも聞き知らざる間、暗証の者とは云ふなり。都て理におれざるなり、譬へば行く水にかずかくが如し。次に即身即仏とは、即身即仏なる道理を立てよと責むべし。其の道理を立てずして、無理に唯即身即仏と云はゞ、例の天魔の義なりと責むべし。但し即身即仏と云ふ名目を聞くに、天台法華宗の即身成仏の名目づかひを盗み取りて、禅宗の家につかふと覚えたり。然れば法華に立つる様なる即身即仏なるか如何とせめよ。若し其の義無く押して名目をつかはゞ、つかはるゝ語は無障碍の法なり。譬へば民の身として国王と名乗らん者の如くなり。如何に国王と云ふとも、言には障り無し。己が舌の和らかなるまゝに云ふとも、其の身は即ち土民の卑

しく嫌はれたる身なり。又瓦礫^{がりやく}を玉と云ふ者の如し。石瓦を玉と云ひたりとも、曾て石は玉にならず。汝が云ふ所の即身即仏の名目も此くの如く有名無実なり、不便^{ふびん}なり不便なり。次に不立文字と云ふ。所詮文字と云ふ事は、何なるものと心得^か此くの如く立てられ候や。文字は是一切衆生の心法の顯はれたる質^{すがた}なり。されば人のかける物を以て其の人の心根^{こゝろ}を知って相する事あり。凡そ心と色法とは不二の法にて有る間、かきたる物を以て其の人の貧福をも相するなり。然れば文字は是一切衆生の色心不二の質なり。汝若し文字を立てざれば汝が色心をも立つべからず。汝六根を離れて禅の法門一句答へよと責むべきなり。さてと云ふも、かうと云ふも、有^うと無^むとの二見をば離れず。無むと云はゞ無の見なりと責めよ、有と云はゞ有の見なりと責めよ。何れも何れも叶はざる事なり。次に修多羅の教は月をさす指の如しと云ふは、月を見て後は徒^{いたずらもの}者と云ふ義なるか。若し其の義にて候はゞ、御辺の親も徒者と云ふ義か。又師匠は弟子の為に徒者か、又大地は徒者か、又天は徒者か。如何となれば父母は御辺を出生するまでの用にてこそあれ、御辺を出生して後はなにかせん。人の師は物を習ひ取るまでこそ用なれ、習ひ取って後は無用なり。夫天は雨露^{それ うる}を下すまでこそあれ、雨ふりて後は天無用なり。大地は草木を出生せんが為なり、草木を出生して後は大地無用なりと云はん者の如し。是を世俗^{せぞく}の者の譬へに、喉^{のんど}過ぎぬればあつさわすれ、病愈えぬれば医師^{いすし}をわすと云ふらん。譬へに少しも違はず相似たり。所詮修多羅と云ふも文字なり。文字は是三世諸仏の氣命^{いのち}なりと天台釈し給へり。天台は震旦の禅宗の祖師の中に入りたり、何ぞ祖師の言を嫌はん。其の上御辺の色心なり。凡そ一切衆生の三世不断の色心なり。何ぞ汝本来の面目を捨て、不立文字と云ふや。是昔移宅^{わたまし}しけるに、我が妻を忘れたる者の如し。眞実の禅法をば何としてか知るべき。哀れなる禅の法門かなと責むべし。

次に華嚴・法相・三論・俱舍・成実・律宗等の六宗の法門いかに花をさかせても、申しやすく返事すべき方は、能く能くいはせて後、南都の歸伏状を唯よみきかすべきなり。既に六宗の祖師が歸伏の状をかきて桓武天皇に奏し奉る。仍って彼の歸伏状を山門に納められぬ。其の外内裏^{だいり}にも記されたり。諸道の家々にも記し留めて今にあり。其れより已来、華嚴宗等の六宗の法門、末法の今に至るまで一度も頭をさし出ださず。何ぞ唯今事^{こと}新しく、捨てられたる所の権教無得道の法にをいて眞実の思ひをなし、此くの如く仰せられ候ぞや、心得られずとせむべし。

次に眞言宗の法門は、先づ眞言三部經は大日如来の説か、釈迦如来の説かと尋ね定めて、釈迦の説と云はゞ、釈尊五十年の説教にをいて已今当^{於 いこんとう}の三説を分別せられたり、其の中に大日經等の三部は何れの分にをさまり候ぞと之を尋ぬべし。三説の中にはいづくにこそおさまりたりと云はゞ、例の法門にてたやすかるべき問答なり。若し法華と同時の説なり、義理も法華と同じと云はゞ、法華は是純円一実の教にて、曾て方便^{かつ まじ}を交へて

説く事なし。大日經等は四教を舍用したる経なり、何ぞ時も同じ義理も同じと云はんや、謬りなりとせめよ。次に大日如来の説法と云はゞ、大日如来の父母と、生ぜし所と、死せし所を委しく沙汰し問ふべし。一句一偈も大日の父母なし、説く所なし、生死の所なし、有名無実の大日如来なり。然る間殊に法門せめやすかるべきなり。若し法門の所詮の理を云はゞ、教主の有無を定めて、説教の得・不得をば極むべき事なり。設ひ至極の理密・事密を沙汰すとも、訳者に虚妄有り。法華の極理を盗み取って事密真言とか立てられてあるやらん不審なり、之に依って法の所談は教主の有無に随って沙汰有るべきなりと責むべきなり。次に大日如来は法身ほっしんと云はゞ、法華よりは未顕真実と嫌ひ捨てられたる爾前権教にも法身如来と説かれたり、何ぞ不思議なるべきやと云ふべきなり。若し無始無終の由を云ひていみじき由を立て申さば、必ず大日如来に限らず、我等一切衆生ろうぎもんもろうに至るまで、みな無始無終の色心なり。衆生に於て有始有終と思ふは外道の僻見びゃっけんなり、汝外道に同ず、如何と云ふべきなり。

次に念仏は是浄土宗所用の義なり。此又権教の中の権教なり。譬へば夢の中の夢の如し。有名無実にして其の実無きなり。一切衆生願ひて所詮なし。然れば云ふ所の仏も有為無常の阿弥陀仏なり。何ぞ常住不滅の道理にしかんや。されば本朝の根本大師の御釈に云はく「有為の報仏は夢中の権果、無作の三身は覚前の実仏」と釈して、阿弥陀仏等の有為無常の仏をば大いにいましめ、捨てをかれ候なり。既に憑む所の阿弥陀たの仏有名無実にして、名のみ有りて其の体なからんには、往生すべき道理をば委しく須弥山の如く高く立て、大海の如くに深く云ふとも、何の所詮有るべきや。又経論に正しき明文ども有りつたなと云はゞ、明文ありとも未顕真実の文なり。浄土の三部経に限らず、華嚴経等より初めて何れの経教論釈にか成仏の明文無からんや。然れども権教の明文なる時は、汝等が所執の拙つたなきにてこそあれ、経論に無き僻事ひがごとなり。何れも法門の道理を宣べかざ厳り、依経を立てたりとも夢中の権果ごんがにて無用の義に成るべきなり。返す返す。